

平成22年 4月10日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：19401038
研究課題名（和文）太平洋島嶼部における強制移住経験者の歴史認識構築と未来への投企に関する研究
研究課題名（英文）Banaban diasporic identity and memory of forced migration

研究代表者
風間 計博（KAZAMA KAZUHIRO）
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：70323219

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：ディアスポラ 強制移住 集合的記憶 アイデンティティ キリバス フィジー

1. 研究計画の概要

（1）研究の背景および目的：本研究は、第二次大戦中に故郷バナバ島（現キリバス領）から追われ、帰郷を果たせぬままフィジー諸島のランビ島で困窮化した生活を送るバナバ人、および再移住者を主たる対象とする。

バナバ島は良質の燐鉱石を産出し、20世紀初頭以降、英国の会社によって採掘が進められた。第二次大戦中、東進した日本軍によって、バナバ人はナウル、コシャエ、タラワへ強制退去させられた。戦後、燐鉱石採掘拡大を目論む英国により、詐欺まがいの方法で数千キロ離れたランビ島へ人々は移送された。

それぞれ1970年にフィジー、1979年にキリバスが英国から独立し、バナバ人は国境線によって故郷の島から切り離された。また、バナバ島の内陸部は、80年間にわたる採掘によって荒廃し、居住不可能な状態である。

本研究の目的は、ランビ島上陸記念碑の建立や祖先の経験を再現する舞踊や語り等の歴史表象を手がかりとして、バナバ人がいかに過去の出来事を認識し、それを共有・伝達してきたのか、悲劇的強制移住に関する集合的記憶をいかに形成・再生産し、ナショナリズムを醸成してきたのかを考察することである。さらに、経験された歴史を踏まえて、調査地の人々が、いかに未来を見据えて模索し、自らを投企しているのかを論じていく。

（2）研究方法：人類学におけるディアスポラ論、記憶・認知論に関する文献研究を行って理論的素地を形成する。さらに、フィジー諸島のランビ島および都市部、キリバス都市部に居住するバナバ人ディアスポラの日常生活を把握するために、実地調査を行う。多

くのバナバ人が困窮生活を送るなか、キリバス人やフィジー人との関係において、いかに自らのエスニシティを自覚し、アイデンティティを認識・構築しているのか、生活の場における参与観察を通じて情報収集を行う。

2. 研究の進捗状況

（1）ランビ島および都市部における困窮化：フィジーには多くのエスニシティが混住する。フィジー系住民やポリネシア系ロトウマ人は先住民として政策的に優遇され、インド系住民や華人は政治的に差別されながらも経済力を有する。対照的に、エスニック・マイノリティとしてのバナバ人は、ソロモン系住民（19世紀にブラックバーディングによってフィジーに来たプランテーション労働者の子孫）と並び、貧困層に位置づけられる。

ランビ島は、バナバ島の燐鉱石採掘終了に伴う年金停止以降、困窮化の度合いが強まっている。かつて整備されていたインフラも老朽化し、フィジー政府や海外NGO等からの援助なくして立ち行かなくなってきた。

島において現金を得るための職はきわめて限られ、換金用のカヴァヤやココヤシを栽培して細々と収入を得る世帯がほとんどである。食料は主に自給的栽培のイモに依存する。

こうした状況にあって、フィジーの都市部やキリバスへ現金や教育機会を求めて出て行く者が後を絶たない。しかし、教育資金を捻出するのも容易ではない。フィジーでは、バナバ人学生はエスニック・マイノリティ向けの奨学金以外には獲得困難である。多くの若者が高等教育を受ける機会もなく都市に留まり、結果として不定期労働や単純労働に

就いて低所得層の生活を営むことになる。

(2) キリバスへの再移住：バナバ人はキリバスに査証なしで入国・滞在できる。フィジーでの困窮を逃れ、就職・教育の機会や土地相続を目的として、キリバスの首都タラワに再移住するバナバ人もいる。一部の若者は、タラワの高校で教育を受ける。そして、キリバス政府やオーストラリア等から奨学金を獲得し、フィジーに戻って大学等の高等教育機関で学ぶという戦略が採られている。

(3) 都市中間層のナショナリズム醸成：フィジーにおいて学業成績が良く、経済的に余裕があったり、フィジー人の父をもち奨学金獲得に有利な子弟は、高学歴を修めることが可能となる。大学卒業者は、銀行員、公務員や教員等の安定した職に就く可能性が高い。さらに豪州等、海外へ移住する者もいる。

こうした都市エリートの一部に、バナバ人ナショナリズムに傾倒する者がいる。西洋人の協力下、バナバ人の歴史や神話の情報を収集して本を編纂したり、バナバ人支援のHPを立ち上げ、エスニシティの独自性や先住民としてのバナバ島の権利回復を主張する。

バナバ人ナショナリズムに結びつく情報は、都市におけるバナバ人の拠点（ランビ島評議会事務所、バナバ人メソジスト教会、評議会経営カフェ店）で口コミにより、低所得者層に好意的に受容され、広く流布していく。

(4) 集合的記憶の生成：ランビ島のバナバ人は、第一の故郷であるバナバ島への帰還を強く希望している。同時に移住先のランビ島を第二の故郷と見なす。ランビ島住民は1945年の初上陸記念碑を海岸部に建立し、毎年12月15日を中心に上陸を祝う式典やパレード、スポーツ、歌や踊りの大会を開催する。式典時、バナバ人舞踊団は、神話時代から英国による燐鉱石の採掘、第二次世界大戦中の日本軍による侵略と虐殺、ランビ島への移住の歴史経験を歌劇により表現する。

近年、神話や老人の強制移住体験談をまとめた書物が、海外やフィジーの都市エリートを中心に上梓されている。ランビ島の学校においても、バナバ人の歴史に関する授業が行われ、世代を超えた歴史経験の集合的記憶が伝達されている。

この集合的記憶は、均質で直線的な「単一的記憶」であり、内容は選別・標準化・固定化されている。均質なバナバ人エスニシティやアイデンティティを生成する強固なイデオロギーを包含し、明確な境界線を引き、他者排除を厭わない思考を広範に流布させる装置である。

一方、バナバ人の系譜を引きながら、

ナショナリズムを批判するエリートもいる。タラワに住み、キリバス政府やキリバスの教会で要職を占め、自らバナバ人でなくキリバス人と名乗る者もいる。

バナバ人の困窮化に伴い、歴史的悲劇を強調するナショナリストにより、エスニシティの固定化が進行している。同時に、悲劇の忘却の選択により、逆方向のアイデンティティが生成されている。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

従来の研究蓄積に加えて、海外実地調査と文献研究により新たな資料と知見が得られ、研究目的に合致した方向に進んでいるため。

4. 今後の研究の推進方策

引き続き実地調査を遂行して資料蓄積に努める。また資料の分析を深めるため、理論的考察の深化に適う文献研究を進めていく。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①風間計博 「人類学における生物性の諸相—身体と感情の解放に向けて」 『社会人類学年報』 34巻：25-50, 2008. 査読有

②風間計博 「フィジー諸島・ランビ島における韓国ドラマ受容のあり方—ジェンダーの差異を軸とした一考察」 『比較文化研究』 3巻：1-15, 2007. 査読有

[学会発表] (計2件)

①風間計博 「過剰な感覚が呼び醒ますもの」文化人類学会第43回研究大会 2009年5月30日 大阪国際交流センター

②風間計博 「キリバス環礁における〈もの〉と身体の相互関係」文化人類学会第42回研究大会 2008年5月31日 京都大学

[図書] (計3件)

①風間計博他 『知の大洋へ、大洋の知へ』塩田光喜編 彩流社 2010.

②風間計博他 『オセアニア学』吉岡政徳監修 京都大学学術出版会 2009.

③風間計博他 『文化人類学事典』文化人類学会編 丸善 2009.